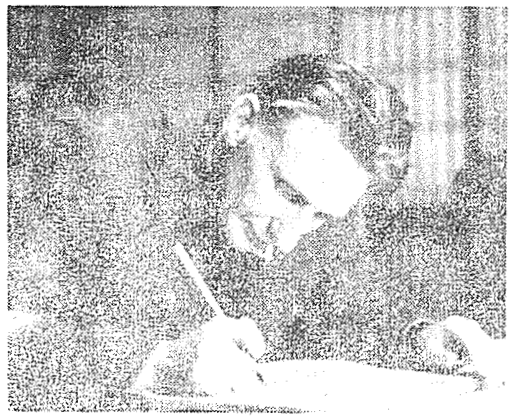
關西大學學報

No. 230

Time has his kindlier moods; in these,
He gives us hills and lakes and seas,
He lets us muse with buds and flowers.
He heals all hurts with temperate hours;
Kindness throughout the world he sends
And gathers round him learnig's friends.
With respect and gratitude,
Edmund Blunden
2 February, 1949.

「時」は今あはれを知りて
海山の清けきを見せ
芽立ちまたほころぶ花に
歌しぬぶ心誘ひ出
時つ風おだしきからに
もろもろの傷癒やしつゝ
なべて世界にめぐみをおくり
御が遊にぞ學びの友を
集へたるかも

敬意と感謝をもちて
エドマンド・ブランデン
（堀正人譯）



ブランデン氏來學

英詩人E、ブランデン氏は二月一日來學し下記題名にて得意の講演を行つた。
1、英國文學の主流と現代作家

新收生田文庫について

文學部教授　吉永登

先般細江博士の藏書の寄贈を添うした本學は、今又、同じ吹田市の故生田耕一氏萬集にかゝる文獻の寄贈を受けることになつた。時あたかも新制大學轉換の機に國文學科の新設を見た本學に取つてはまことに意義深いものがあり、謝ゆるところ乏しいにかゝはらず終始かはらぬ好意を示された生田家の當主講藏氏に心からの謝意を呈する次第である。同家では以前に、洋本類はほとんど整理して居られるので今回の分は册數にして凡そ二千册に過ぎないが、それだけに故人の專攻の上代日本文學に關するものを網羅して居り、その方面の學徒を利することが少くないことゝ思ふ。此處にその一班を紹介するに當つて故人の學界に於ける業績を回顧し生田家の御好意にこたへることにした。

故生田耕一氏は先代秀氏によつて創設せられた吹田ビールの重役であつた。北野中學の前身である大阪中學に學ばれ本學の豫科長を長く勤められた故村上喜貞先生とは同窓の親友である。もともと趣味の人で、その歌筒の蒐集と研究はつとに一家をなしてゐて、「歌筒の鑑定」の好著があり、又邦樂に關する造詣も深い。中年小田原に閑居せられてからは和歌に興味を持たれ、竹柏園佐佐木信綱博士に師事せられたのであるが、その影響もあつて萬葉集中の東歌の研究に志された。

後再び吹田に落付かれるや、村上先生の紹介によつて京都大學の澤瀉久孝博士に近づかれることになつた。この頃から氏の萬葉學は次第に本格的となり、京都學風のもとそのすぐれた資質はめぐまれた財力と相俟つて立派な成果をおさめるに至つたのである。氏の編纂になるものには萬葉釋文索引（記傳之部）、古葉略類聚鈔索引、萬葉釋文索引（頌風漫筆之部）東雅索引等があつて、何れも學界を益したものであるが、氏自らも亦かうした資料を存分に活用せられ、雜誌「藝文」「國語國文の研究」等に相次いですぐれた論文を發表せられたそれらの論文は何れも故人の歿後に刊行せられた萬葉集難語難訓考に收められている。

今その中から一二注目すべきものを拾つて見るに、萬葉集三、二七七番の

早や來ても　見てましものを　山城の　高槻村　散りにけるかも

の第四句「高槻村」は、古來「たかつきむらの」とか「たかつきのむら」と讀まれ、今の高槻市（大阪府）と解し、ために「山城の」とある第三句との矛盾に苦しんだのであるが、氏によつて初めて「たかのつきむら」と讀まれるに至つた。かく讀むことによつて、「山城の多賀村の槻の林」と解し得ることになり何れより見ても矛盾のない訓を得たのである。この訓はその後學者の認めるところとなつてまづ定訓となつたものと考へられるが、この一事よりしても氏の功績は大きい。

最後にその藏書中まとまつたものを拾つて見ると

古典保存會の複製本、萬葉畧林（藍紙本と類聚古集だけがなく、これは目錄にも見えないので、もとから缺けていたものらしい）貴重書刊行會複製本、正續群書類從、古事類苑、校本萬葉二部、萬葉集總索引二部、正續國歌大觀、萬葉集叢書、國歌大系、隔書刊行會叢書、本居宣長全集、賀茂眞淵全集、橘守部全集、日本書紀通釋、六國史、雅言集覽、一切經音義、日本文學大辭典、佩文韻府、和名類聚鈔、新撰字鏡、古寫本日本書紀、廣文庫、國文註釋全書、南都祕笈、ウン帙祕芳、續扶桑珠寶、古萬葉集

等がある。萬葉集研究には至れり盡せりで複製本を始めとして、俗書に至るまで一通り揃つて居ることは實際學問するものにとつては利便此の上もない。

唯一の稀覯書としては西念寺本類聚名義抄がある。類聚名義抄の研究家であつた故岡田希雄氏も未見の書で、これこそ本學圖書館の誇るべき貴重書の一つとなることでしらう。好學家の利用を期待して止まない。

豫科追想

惜別の辭

文學部教授
前豫科長　山田松太郎

わが關西大學豫科は本年三月を以て、愈々その二十七年の輝かしい歴史の幕を閉ずることになつた。今日あることは、昨年四月わが大學が新制度による大學として發足するに至つた時、既に決定したことである。從つて豫科に職を奉ずる者及び籍をおく者は、等しくその覺悟と心組とをもつて此の一年間を送つてきたのである。その間、最後の豫科長としての私の念願は、此の光輝ある歴史の末年を、悲なきばかりではなく、有終の美を飾つて終らせたいとの一事であつた。おそらく同僚諸教授、講師及び職員各位も皆、同じ心であつたと思う。又學生諸君に於ても同じ思いであつたであろう。しかし終に豫科と別れる最後の日は來た。張りつめた心の弛むような、又一日の勞を終えて靜かに沈み行く太陽を眺めるような氣持がする。そして夕の旅邊に二十餘年の過去を顧みる時感激無量である。世に十年を一昔という。それを重ねること三たびになろうとする。今までに此の學舍の内に於て幾千の若人が育てられ、そして校門を出て行つたことであろう。現在、官界に、實業界に、さては又法曹界に、學界に活躍する人々の、ありし日の白線丸帽姿が彷彿として眼の前に浮ぶ。懐しく、頼もしく心の中には自ら喜びが湧いてくる。熱に意氣、純情と誠實、燃ゆる向學心人生への穢れなき懐疑と美しき理想、交友とスポーツ、讀書と議論、それらの中に日日を送る若きであつた。そして其處に自らわが豫科精神が生れ、傳統が築かれて行つたのである。

今や二十七人目の末子の門出を祝うとともに、心靜かに年古りし「豫科」の門札を取りはずし、これを見つめつつ、惜別の情の胸に迫るのをおぼえる。

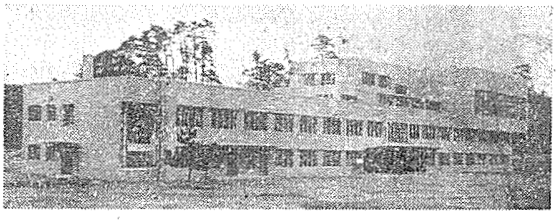
しかし翻つて考えてみれば、この度の豫科解消は、盛んなりしものの力衰えてその姿を消すのではなく、時代に即して生れ出でた新制度による大學に合體するのであり、より大いなるものの體中に再生するのである。これこそ實に發展的解消なのだ。今後門札は取りかえられても、その建物は以前と同じ學舍であり、そこに集まる若人達の姿は角帽に變ろうともその人は同じ輝く傳統と精神に生きる學徒達である。この傳統とこの精神とは白堊の學舍を取りまく秀麗なる自然と、その門に往來する人の親和の中に脈々として盡きぬ流れとなつて永久に續いて行くことであろう。その流れある所、常に豫科は生きてあり、そしてこの學園はいつも、古くして而もまた新しき、たぐいなき學園となるであろう。

思出の二三

文學部教授
前豫科教授　飯田正一

新制大學への移行に伴なつて、大學豫科というものが、今後はわれわれの思出の中にだけ生きることになつた。豫科としては、いわば發展的解消であつても、豫科の名が無くなるということは、やはり多少の感なきを得ない。まして青春の情熱を傾けて豫科生活を送つた諸君にとつては、なつかしい追憶の一こまが消え失せてしまうような哀愁の念を、禁ずることが出來ないのではないかと思う。

豫科の思出は、誰にとつても、秀麗をほこる學園の風景と共にうかんでくるに違いない。私ども東京からやつて來て、はじめて校庭に立つたとき、その明るい典雅な風物に、ひどく新鮮なものを感じて心をひかれたのを覚えている。



關西大學五十年史を繰つてみると、豫科の開設は、大正十一年六月となつている。校舍は、正門を入つて地獄坂――その頃學生はそう呼んでいた――を登りきつたところ、つまり、いま大學院の建設工事をはじめている場所にあつた。木造で、ずつしりとした重みを感じさせるような建物だつたが惜しいことに、昭和十年の暮に焼けた。開設當時は、まだ圖書館もグラウンドも出來ていなかつたから、起伏の多い丘陵の上に、その校舍一つだけが、ぽつんと立つていたのだという。大學昇格のために、文部省から係官が視察にきたときも、他に案内することろがないので、建物の方はそこそこにして、花堂の上に連れて行き、そこから、豫科校舍附近を中心とする遠大な構想を説明したのだそうだ。係官も、丘陵地のもつ遠望や曲線の美しさに打たれたのか、こんな環境のいゝところは外國の大學にもそう多くはないといつて、「自然の秀麗」を讃えたという。外に賞めようがなかつたのかも知れない。秀麗な環境にめぐまれたということは、何といつても俸せだつた。環境は人をつくるというが、こうしたところに學ぶ機會をもつたものは、まことに幸だと思う。それがわれわれの心を、どんなに深く養つてくれることか。

戰に敗れた祖國の自然を語るのは、餘りにも傷ましい。しかし、學園の自然は、今でも美しい。戰爭による荒廢が、こゝにも跡を止めているとしても、こゝの自然は、やはりわれわれの心に、深く沁みとおつてくる。此のごろは若葉がむせぶように匂つている。私たちは、心のふるさととしてこゝにわれわれの夢と希望を、これからも一つづゝ現實させて行きたいと思う。豫科を愛したものにとつては、その夢と理想の中に、豫科の思出が必ずつながつていよう。

草創期の豫科を語り得る人は、學園にも、もう多くはいないようだ。私が就職したのは昭和四年で、學園の規模も組織も一應整つてからだつたが、それでももう二十年になり、私もいつの間にか古顔の一人になつてしまつた。

豫科を語ろうとして、第一に思いうかぶのは、村上喜貞先生であろう。先生はながい間主事として豫科長として、豫科を主管しておられた。訓育については極めて厳格だつたから、學生仲間にもこわい先生で通つていたようだ。運動部の猛者連中なども縮みあがつていた。しかし、先生に接するものはみなその高潔で誠實な精神に、心服していた。專攻の英文學の外に、東西の美術にも深い造詣を持つておられた。豫科の第一回の志願者は百五十餘名だつたというが、最近では三千名を突破したこともある。この數字は、豫科の發展を最も端的に示すものであろうかが、豫科がこのようになつたのも、先生の力に負うところが多かつた。

先生は、停年退職ののち、間もなく亡くなられたが、戰爭末期の混亂と窮乏が結局先生の死期を早めたのである。

教授室の中から思出を語るとなると、いきおい、先生がたのことが主となつてくる。不遜のそしりは免れないが、許していただきたい。

豫科には錚々たる先生が多かつた。そうした多くの先輩を、私は深い尊

敬と思慕の念をもつて、思いうかべるのである。中には、既に故人となつたものもあり、學園を去つた方もすくなくはない。

私が新學のころは、下宿で、學生と一緒になる機會も多かつたが、學生は、その私に、それでも少しは遠慮するような口ぶりで、よく先生がたの噂を聞かせてくれた。そんなとき、いつでもまつさきに檜玉にあがつたのは、大立目、向、中村といつたような先生だつたと思う。

三人とも獨逸語の先生だつたのも一奇といえようか。大立目重雄先生はしばらく圖書館内に起居していたが、圖書館の裏の、山の谷邊りの池から、龜を捕つてきては手料理でさかんに召上るので、しまいには、龜も殆んどいなくなつてしまつたという。してみると、龜も食える分に入るわけになるのかも知れないが、この話はどうやらその頃から傳説化していたもののようである。

向軍治先生は大立目先生と同じように、講師として見えていた。永らく慶應にいて、私など、子供の時から名を聞いていた大家だつた。語學にかけては、決して人に讓らなかつた。明治のはじめに教育を受けただけに、漢籍にも精しく、よく詩の話をしておられた。白い顎ひげが、上品で、翁の面のように美しかつた。毒舌を弄するのが得意で、文部省の役人が視察に來たときなど、途端に講義を止めて、文部省攻撃をはじめるという調子だつた。獨逸人なんて、獨逸語を知らないものが多くて困りますよ、などと、私もしばしば聞かされた。大きなボストンバックを離したことがなく、地下室の食堂へ行つてはその中から小さな茶びんを出して、隅の方でお茶か藥を呑んでおられた。

學園から退いたのは、不戰條約の問題で、憲兵につけられたためだつたと思う。

この向先生が、教授室で、中村先生と大きな四角の火鉢を圍んで、何かをしきりに燒いていたことがあつた。じゆうじゆう音をたてて、香ばしい匂が、部屋いつぱいに漂つていた。蝗を燒いていたのである。どうも浮世ばなれした話だが、二人の老先生は、それを甘そうに食べながら、私にもどうですといつて出された。そのときは、私もちよつと面くらつて、氣おくれがしただけでなしにさすがに食べなかつた。私も外地にいて、終戰後食うものがなく蝸牛でも鼠でも何でも、たいていのものは口にしたが、蛇の味を食うと、いつもこの老先生がなつかしく思い出された。學園の附近には蛇が、實にたくさんいた。大きな奴が、部屋の中を、ずるずると這いまわつていて、うつかりすると踏みつけそうになり、どうも餘りいゝ氣持がしなかつた。もつとも、蛇などは別として、その頃は、春には蕗から雉子が飛びたち、冬には、グラウンドわきの笹藪から、兎が飛び出したりした。

中村鉀次郎先生は、帝大の銀時計組だと、學生たちは噂していた。私たちの知つている先生は、世俗に超越しきつていた。雜談の最中に、よく突拍子もない話題を持出され、その度ごとに、われわれは度肝をぬかれて呆然としたものである。

學生が、豫科には過ぎた存在として、日本一を誇つていた藤澤章次郎生も、去年の暮、寶を易えられた。先生は大阪の古い漢學の傳統を傳えた學者であつた。先生のような風格をもつた學者は恐らく今後もう出まい。

由來漢文というものは、學生には敬遠されがちなのだが、深遠な學問を噛みくだいた、わかい易い先生の講義は、たいへん人氣があつて、學生は漫才を聞く―それは先生に對する親しみを含めていたわけでもあつたが―、と稱しては、その大阪辯に魅せられ、飽きることがなかつた。

思出は、なお多くの人につながつて、それからそれへと盡きないのだが、與えられた枚數もう超過している。これ以上の非禮を敢えてすることは、憚らなければならないと思う。

豫科の教授室は、いつでも明るくて實に和やかだつた。誰しもが、こんな氣持のいゝところはほかにないといつていた。そうしたところで何年かを過し得たのは、私にとつて生涯の幸福だつたと思つている。そして私は、思出の中にある豫科を、いつまでも愛しつゞけていく積りでいる。

學園

第二十六回 卒業式擧行

舊制大學學部第二十六回新制大學學部第一回卒業式は三月十九日午前十時より擧行せられた。學士試驗合格證書授與の後、岩崎學長の式辭あつて高瀨文相、赤間大阪府知事近藤大阪市長、岡本吹田市長、岩崎校友會長、織田學士會理事長の祝辭、これに應へて新學士代表の答辭あり「自然の秀麗……」と學歌一節合唱して式を閉ぢた。

因みに本學園關係諸學校も左記の通り卒業式を擧行した。

三月二十三日　關西大學專門部
三月二十五日　關西工業專門學校
三月十三日　關西大學第一高等學校
三月六日　關西大學第一中學校

第二回新制大學 入學式擧行

新制大學第二回入學式は櫻花咲く四月二十日午前（第一部）、午後（第二部）の二回に亘つて擧行、岩崎學長は入學生に對し學業研究の道を諄々と説いて祝辭を述べ、學生の宣誓あつて意義深い入學式を終る。

因みに本財團關係諸學校の入學式左の通り擧行された

四月十一日　第一高等學校
四月二日　第一中學校

文學部に 四學科新設

本年度より文學部に新聞學科、佛文學科、獨文學科及史學科の四學科を新設、尚新聞學科わ關西で最初である。新設四學科の教授、講師わ左の通りである。

新聞學科
教授　井上吉次郎
〃　藤田進一郎
講師　鎌田敬四郎
〃　竹中一雄

佛文學科
教授　三木治
〃　中井駿二
專任講師　土居博
講師　田中榮一
〃　佐藤一夫

獨文學科
教授　上道直夫
助教授　前田敬作
〃　福本喜之助
員外教授　渡邊格司
講師　中村恒雄
〃　齋藤清

史學科
教授　横田健一
講師　石濱純太郎
〃　安藤俊雄
〃　魚澄惣五郎
〃　佐藤長
專任　秋山宏
〃

日本英文學會 關西地方大會

昭和二十三年度日本英文學會關西地方大會は昭和二十三年十一月十三、十四の兩日に亘つて關西大學千里山豫科校舍に於て開かれた。

先づ第一日は午後一時より大講堂に於て堀正人教授開會の辭に始まり次の順序で研究發表が行はれた（司會、關大教授山田松太郎氏）

1、吉田安雄氏（浪校教授）―「ヴァジニア・ウルフの"To tae Light-house"と時間意識の問題」
2、梶原秀男氏（關大教授）―「スウイフトの詩について」
3、玉木意志太郎氏（人文學園教授）―「フォールスタフ考」
4、貞方敏郎氏（同志社大學教授）―「Clauseの學法的處理について」
5、大浦幸男氏（三高教授）―「リードの創作理論について」
6、山川鴻三氏（三重醫大豫科教授）―「ウォル

タ・ベーターのワーズワース論について」第二日は午前の部のみ第一、第二會場に分れ、次の如く行はれた。

第一會場（司會、關西學院教授壽岳文章氏）

1、山下修氏（神戸外專教授）—「トマス・ハーディの人生觀」

2、角倉康夫氏（姫高教授）—「テイ・エス・エリオットの飜譯論」

3、進藤浩二郎氏（關大教授）—「サマゼット・モームの小說について」

4、二宮魯道氏（神經大學科教授）—「ロレンスのユートピア」

第二會場（司會堀正人氏）

1、伊賀衛氏（關學高校教授）—「エドワーズの矛盾と眞實」

2、橋爪洋氏（神戸外專教授）—「ロバアト・ヘリック」

3、越智文雄氏（同志社女專教授）—「ミルトン理解への一つの道」

4、五島忠久氏（浪高教授）—「ジェンダアとは何か」

5、川村泉氏（天理外語教授）—「シェイクスピアの文律について」

午前の分終了後、懇談會あつて午後の研究發表に移つた（會場大講堂、司會京大助教授中西信太郎氏）

1、東山正芳氏（關學高校教授）—「フアレルを生かすもの」

2、柴田徹士氏（浪高教授）—「ウルフの〃燈台へ〃—音樂形式による小說」

3、甲元健雄氏（大阪外專教授）—「シェイ・エム・マリの批評の性格」

4、石田憲次氏（京大教授）「The so-calle d ad-iddage」（英語講演）

以上で研究發表を終り、中西信太郎氏の「閉會の辭」を以て大會を終了した。

學內英文學會例會

復活第三回關西大學英文學會は、昭和二十三年十二月四日（土）午後二時より學部第九教室にて、教授、先輩、學生、並びに一般來聽者多數參集のもとに、左のプログラムによつて行はれ、盛會であつた。

プログラム

司會　教授　進藤浩二郎

1、シェイクスピアの作詩法とヴアースボーズ

英文學科學生　栗駒　正和

2、The necessityof Criticsm in iapan

同　小崎　市藏

3、ウアーズ・ワースとその詩

同　住吉　保男

同　小野美代子

4、キーツの詩における Ode to psycile の現實味

同　田口　整

5、チヨーサとダンテ

教授　廣瀨　捨三

6、ヴアージニア・ウルフについて

同　堀　正人

新制大學院基準

新制大學に於ける大學院の基準案わ先程大學基準協會より文部省に提出せられたが、同案に依ると大學院わアメリカに於けるマスターに相當する修士、ドクターに相當する博士の學位を與える二課程を置き、修士の學位は全日制で一年以上在學して專攻科目につき三十單位以上を修め研究論文を提出、少くとも一外國語に通ずることを條件とし、博士は全日制で三ヶ年以上在學、專攻科目につき五十單位以上を修めて獨創的研究に基く研究論文を提出し、最終試驗を受ける、外國語についても二ヶ國語以上の外國文獻を利用し得る能力を必要とすることになつている。

尙本學もこの案に基いて新制大學院を設置すべく着々準備、學舍も目下新築中で程なく完成すれば、我が學園に一段と光彩を放つことゝなろう。

豫科最終文化祭

本學が新制大學として發足するに伴い、二十七年の歷史と傳統を誇つて來た本學豫科も發展的に解消され、丸帽白線と共に年經た門札も淡い青春の夢として永遠の彼方に消ゆる……其の名殘を惜しみ限りない追憶にと豫科最後の文化祭を三月十三日大手前會館にて開催、岩崎學長、山田前豫科長八鳥前豫科學生部長の挨拶に續いて辯論、演劇、音樂、オペレッタ等數々の催しに尾の華を咲かせて意義深く文化祭を終つた。

開架式（假稱）學生文庫

新制大學として學生の勉學上圖書の利用は益々緊要となつたので、新らしく學生本位の集書を設け、各學科に亘り最新の知識を盛る良書を備付けることになつた。現在我が國では未だ普及していない所謂開架式を採用し學生は自由に書架に接して直接に圖書を選擇して閱讀し得る進步的な方法によつて學生の研學の利便と向上を計るものである。一月二十日開庫式を行い、その翌日から一般學生に公開した。備付圖書は主として關西大學教育後援會よりの寄附によるもので、又この外に本學學部學友會卒業者一同の寄附があつた。現在圖書の數は約七百册であるが、學生の利用は實に著るしいものである。この機會に各寄附者に對して深甚な謝意を述べる次第である。

圖書館學講習所

近來各種の圖書館特に學校圖書館の增設と充實とは著るしいものがある、その圖書館の運營を適當する圖書館專門家は不足している。又圖書館職員を養成する機關は昨年に於いて東京に一、京都に二あるのみで、大阪には未だその設置を見ない。よつて本學はこゝに本講習所を開設して斯界の要望に應ぜんとしたのである。講師には近畿地方の圖書館專門家を招聘することになつた。四月二十三日開所式を行つたがスキャップCIE圖書館長ホーファー女史を始め大阪府市の當事者其の他關係者の臨席があつて、各々祝辭を述べられ大へん盛大であつた。授業は四月二十三日より十一月十二日までである。入學資格は大體中等學校卒業者以上となし、授業料は全期間七百圓となつている。

吹田市民に公開

大學民主化の要請と特に吹田市の要望とにより、六月十五日より本學圖書館を吹田市民の一部に公開することになつた。

教育後援會

教育後援會でわ新發足後一ヶ年、其の間多方面に亘つて活動して來たが、本年より一段と活潑なる活動運營の爲、五月二十四日に會則變更と會長選任とを六月十日に副會長會計、常任委員の選任を行い、運營機構を若干改めた。

新委員左の通り

會長　村田守三郎
副會長　尾崎愛之助
〃　樫本信雄
〃　大石雄一郎
會計　三宅正夫
〃　藤波一治
常任委員　市岡保德
〃　片川德三郎
〃　志村三次
〃　森居幸一郎
〃　菊池壽雄

學內報

教授　川上敬逸　三月一日付休職を解く

教授　山木戸克己　三月二日付願に依り職を解く

教授　遠藤汪吉　三月三十一日付本大學專門部長を解く

教授　高橋盛孝　四月一日付本大學專門部長に補する

樫本金次郎　四月一日付本大學教授に任じ文學部勤務を命ずる

教授　遠藤汪吉　四月一日付願に依り職を解く

助教授　植野郁太　四月一日付本大學教授に任じ商學部勤務を命ずる

講師　河野稔　四月一日付本大學助教授に任じ商學部勤務を命ずる

通常協議員會

四月三十日天六學舍にて開催、財團豫算の件に付審議可決した

學友

新學友會委員決る

本年度學部學友會委員の選挙は五月二十日行われ新進氣鋭の新委員に依つて學友會の向上が期待される、猶新正副委員長左の通り

委員長　宮崎　平（政四）
副委員長　田端　昭雄（政四）
〃　篠原　武夫（政四）

尚專門部第一部の學友會役員も改選せられた正副委員長左の通り

委員長　谷口　進（法三）
副委員長　森　潤（經三）

學部學生大會

新學友會委員の決定を見たので五月三十日經商學部講堂で本年度第一回學生大會を開催、種々の問題に關し眞摯なる討論あり參會する者約一千盛會裡に終了

籠球部東都遠征

籠球部は東京へ遠征し、朝日新聞後援の下に、明大體育館に於て、慶應、文理大及明大と夫々試合を行つた、スコア左の通り

六月四日本學95—40慶應
同　五日慶應49—34本學
同　六日本學52—49慶應
文理大50—41本學
同　七日本學67—54明大

二部辯論部の活動

關西大學二部辯論部は本年度も校友各位の御支援に依り各地に於て勁勞學生辯論部として着々と成果を上げている。因みに本年度現在までの活動の一端を列擧してみると

五月三日　憲法發布記念府下新制高等學校優勝辯大會開催、於大手前高校
六月十一日　全大學高專雄辯大會近畿豫選出場於毎日新聞社
六月十八日　全近畿大學第一回定期辯論大會出場、於文化會館
六月二十三日　關西大學文化祭出場、於朝日會館
六月二十七日　西野田工業高校招待辯論大會出場、於同校
七月一日　全大學高專雄辯大會出場、於同志社
デヤベル
七月一日　京都遊説
七月六日　扇町二商高校招待辯論大會出場、於同校

尚休暇中は九州地方遊説の豫定（詳細は後號掲載）

校友

校友會常議員會

校友會常議員會は概ね毎月一回の例會を天六理事會議室で開催、校友側意見を積極的に具申し大學發展の側面的援助を行つている、既往の開催日及議事は左の通りである

二月十五日、一、校友名簿の件一、昭和二十三年校友總會の件一、校友會館の件
三月八日、一、校友會館の件
四月八日、經過報告
五月十六日、一、校友會館の件

尚校友會館は時期尚早として將來に持ち越すことに決定した

校友會北支部發足

大阪市北稅務署內本學校友の親睦を圖るため、校友會北支部を結成、五月七日大阪ミシン會館にて發會式を盛大に擧行本學よりは岩崎學長、原涉外課長出席祝辭を述べた

衆議院議員當選者

北村德太郎（長崎二區、民主前）推薦校友
吉田吉太郎（兵庫二區、民自新）推薦校友
押谷　富三（大阪二區、民自新）大5專法

福田　繁芳（香川二區、民主前）昭2專法
大上　司（兵庫四區、民自前）昭10專一商

法曹千里會

千里山學會で組立た法曹會に活動している在野先輩も三十數名に達し、法曹千里會では六月十日大阪辯護士會館で春の總會を開いた。當日の出席者は左の通り、今晩は在朝在野を含めた會とすることになつた。

福西新左衛門、永田旭、上野誠幸、浪江源治、濱川鶴藏、弓場晴夫、樫本信雄、福岡彰郎、安富敬作、植田完治、山本寅之助、越智比古、市、河內傘三、米田恒治、大澤寛之進、春原源太郎、赤松政雄（順不同）

昭六會

四月二十九日千里山丸見屋で、三谷港上署長に榮轉に付昭六會開催、參加者左の通り

今井府會事務局長、岡部俊吾、門田文三、寺田判次、喜田由造、齋藤善三、三谷久男、嘉根甚次

昭七會

七月十六日午後三時より「北濱グルル」に於いて岩崎學長を圍み母校關大の現況及發展策等について意見の交換あり同期生春原理事並に前辯護士會副會長米田氏の挨拶があつて、お互の健康を祝しつゝ散會當日出席者二十餘名であつた

大校友會豐中支部總會

關大豐中會發會

七月十七日午後五時於櫻塚會館母校關西大學より岩崎學長並に原涉外課長を迎へ校友在學生一同に會し「關大スピリット」の話題に賑つた。

因に前校友支部長遠部氏の後任として安富氏を支部長に薦された。

關大豐中會では會則審議の後、藤井君（經四）衆學を擔つて幹事長に就任された。

大同製鋼

關大會結成

一月七日校友岩本氏宅に於て大同製鋼株式會社關係の母校出身者及在學生を以て大同製鋼關大會を結成、第一回總會を開催、母校の將來を祝福し盛會裡に散會

尚中退社は準會員、會社關係校友を同會特別會員とする、因みに出席者左の通り（順不）

西井晴一、今井繁、西口博二、岩本公夫、横山領祐、木下利明

育英資金募集要項

一、關西大學學生にして學費納入に困難を感ずる者に一人參千圓以上金壹萬圓迄を限度として學費を貸與し其志を遂げしめる目的の下に育英資金を募集する

一、關西大學大成會はこれが主唱者となり博く校友及一般篤志家に呼び掛け第一期目標額金拾萬圓也を募集する

一、募集額金參萬圓以上に達し次第即時事業を開始する

一、育英資金管理人は西本寛一、森川太郎、三島律夫これに當り三人連判するに非ざれば支出し得ないことゝする

一、育英資金貸與生詮衡委員は山本順應、土橋四三、天野平一の三名とする

一、募集總額壹百萬圓に達し次第財團法人組織にする

一、育英資金に御賛同の向は大阪市大淀區長柄關西大學經理局氣付關西大學大成會育英資金係宛御送金下さい、當座振込御利用の時は大和銀行天六支店關西大學大成會當座口へ御振込下さい

關西大學大成會

育英資金發起人（順序不同）

西本　寛一　森川　太郎　池谷龜太郎
廣實　郁雄　三島　律夫　土橋　四三
谷岡　登　山本　順應　天野　平一
霜村　盛郷　山本彌一郎　西村治三郎
中谷　政男　矢野　國臣　杉田　兵作

校友特別寄稿

「八時間勞働」

廣田政之

「わがものと思えば輕し笠の雪」人間の勝手さ、欲張り加減を川柳子は最も適確にズバリと言い當てゝいる。

先頃神戸の某工場の熟練職工が七十六時間ものブッ續けの時間外勞働をやり、日本一の高額賃金を稼いだ迄はよかつたがヤレヤレと一風呂浴びて寛いだ途端に、心臓麻痺を起して、あの世へおさらばをしたと云ふ記事が新聞に出、時間外勞働の是非得失について我々勞働關係の仕事に携はるものゝ間に新しい話題を投げ、今更らの樣に論議の花を咲かせた次第であつた。

勞働基準法で定められた原則の勞働時間は言ふ迄もなく一日八時間は實働であつて、間に一時間の休憩をさしはさめば拘束九時間制になる譯けである。これが長いか短いか亦それだけの時間を働いて生活を支えるに足る賃金を得ることができるかどうかといふ問題は暫く措いて、この八時間といふ長さはそれを決めるのに明白な科學的根據があつたわけではないと思ふが、英國の古い諺に

"Eight hours' work, eight hours' sleep, eight hours' play make a just and healthy day" 「八時間の仕事と八時間の睡眠と八時間の遊びは正しく健康な一日をなす」といふのがあるさうだが、人間が地球自轉の週期を三分して生活にふりあてようとする考えは、かなり古くからあつたことのようである。そうした古い諺が先進國は過去の物語りと化しているのに、わが國では敗戰後、下からの内からの自主的要求としてゞはなく戰勝國の壓力によつて、漸く八時間勞働制が與えられ、殆んど法的に無制限勞働日といふ比類のない劣惡な勞働條件の下から解放されたのである。

ところが〃健康な一日をなす〃筈の八時間勞働制が只今の處勞資双方から餘り喜ばれなくて時間外勞働をやる事が殆んど恒常の狀態にまでならうとしている。勿論當面の理由は定時間の定賃金では今日のインフレ下に自分と家族の生活がやつて行けないから收入增加の方法としてはそれ以外に仕方がないといふのであるそれで基準外賃金を儲ける爲には長時間の勞働も何のその、笠の雪でもわがものならば苦にならぬといふ結果を生む譯けである。

一體勞働基準法から八時間勞働制を取り除いたら何が殘るか、基準外賃金といふものが生れて來るそもそもの原は一應勞働時間を八時間と決めた處から來ているのであるこれが取り去られるか、或いは延長されたならばもはやその根據はなくなり、從つて基準外賃金はいくら稼がうにも稼ぎ樣がなくなるのである。しかし國では敗戰後、下から見れば眼の敵にしている八時間制がとりも直さずその本家本元になつているのに氣がつく筈である。我々日本人の體力ではしかも今日の食糧事情の下で實働八時間を超えて能率の上る職業といふものは考えられない。從つて就業當初から十分充實した働き方をせないで、定時間の作業能力をより長い作業時間内に配分しようとする傾向をもつている。勞資双方の要望によつて若しも八時間制が潰いるような事があつたらそれこそ勞働者の一大不幸である。敗戰日本はこんな狀態では立直りができないとか、何とか等々の理屈は耳にタコの出る程聞かされているが、輕々しく同調してはいけない。若しも勞働時間で譲つたなら次は低賃金の强行である。無制限勞働日低賃金が再り返される樣な事があるなら、それは戰爭前の奴隷勞働にもう一度顚落するものである。

併しさうするより外に生きる途はないといふ反問があるかもしれない。だが殘業によつてあげる生產能率は作業行程の檢討、職場環境の改善等によつて定時に充分遂行し得る餘地がある。勿論其前に確とした最低賃金制の制定、生活給から能率給への轉換が考慮される必要がある。殘業は眞に己むを得ない時にだけ、而も短期に限つて行ふ可きであり、生活は定勞働時の收入に基礎を置き、基準外賃金を含めたものはこれを排除し、短勞働時、高能率高賃金を目途に進む可きである。

勞基法第三六條は勞働者の過半數との協定があれば何時間でも無制限に時間外勞働ができるようになつている。しかし趣旨は臨時に必要な時に限つて爲す可きであると勞働次官通牒は一般に示している。組合指導者の責務は重且つ大である。眼前の小さい利害にとらはれて勞働者に與えられた大きな權利を失ふ樣な事があつたら、恐く再びこれを得るのは困難といふより絶望に近いであらう八時間勞働制を守れ。それは九原則下の勞働者にとつても事業家にとつても容易ならぬ苦難の問題であらう。目前の小利は自己を亡し勞働者階級を毒する。私達は眼光を大にして遠かなるものを見なければならない。

（筆者天滿勞働基準監督署長、昭五、專法卒）

校友各位へ

暑中御見舞申上げます

目下校友名簿作製の爲校友各位の現住所、現職等について調査してをりますので各位にわ御知友の分までも御通知下さつて御協力の程お願ひします

天六學舍　涉外課

大正十一年七月十五日創刊
昭和二十四年八月一日印刷
昭和二十四年八月五日發行

不許複製

發行人　春原源太郎　大阪市北區川崎町七

印刷所　ナニワ印刷所　大阪市大淀區長柄中通二丁目十二番地

發行所　關西大學出版部　責任者　羽野堅二　（出協會員B一一一〇〇二）

關西大學　千里山學舍　大阪市外千里山　電話吹田一二三・四六一
天六學舍　大阪市大淀區長柄中通　電話堀川㊱二一七五六二〇〇七三二

大阪市大淀區長柄中通二丁目十三番地　關西大學

齒科診療開始

關西大學厚生課醫務室齒科分室

今般本學教職員、學生、生徒後援會々員、P・T・A會員、並に其の家族に對して齒科診療を開始することゝなりましたから、御利用下さい

齒科分室所在地　大阪市浪速區日本橋三丁目　松坂屋二階　川村齒科醫院内

但　金曜日は休診とする

尙御利用者は本學厚生課より齒科診療券を受取り御提示下されば、治療代、藥代其の他一切の醫療代は定價の半額とします